

「貯金を切り崩して」はダメ?!

「貯金は『切り崩す』とは言わないでしょう。『取り崩す』ですよ。」——放送で使い方がまちがっていたとして、最近、何度か続いている視聴者からの指摘である。景気が低迷し給料やボーナスが減らされる厳しい経済状況が続くなか、放送で「貯金を〇〇崩して…」と言うことが増えているのだろう。そのとき「貯金を切り崩して…」と言ってしまい、ことばに厳しい視聴者から指摘がくる、ということが繰り返されているようなのだ。

国語辞典を引くと、「取り崩す」には「①とりこわす。」のほか「②ためてあったものを、次第に取って、なくする。」という意味が用例「貯金を－」とともに載っている。一方、「切り崩す」の意味は「切って削り取り、もとの形でなくする。」「相手方の陣形や団結を乱れさせる。」で、用例は「がけを－」「敵陣を－」である（『岩波国語辞典 第7版』）。「貯金を切り崩す」と使えるような意味や用例を載せている辞書はひとつもない。

しかし、実態としては「貯金を切り崩す」を使う人がかなり多くなっているようだ。実は私も「切り崩す」に疑問をもたなかった「切り崩す派」のひとりである。いま「切り崩す派」が台頭している理由のひとつとして考えられるのは、「食費を切り詰める」「家計を切り盛りする」「大所帯を切り回す」など「切り～」の形をもつ他の動詞からの影響で

ある。いずれも「たいへんな思いをしながらも（家のことを）なんとかやりくりする」という意味でよく使う。これらの動詞からの類推もあって、将来のために蓄えてきた貯金にまで手を出さざるを得ない切迫した状況を表現するときの動詞として「切り崩す」が選ばれるのではないだろうか。

さて、私を含む多くの「切り崩す派」にとって味方にはなってくれなかった辞書の記述だが、古い辞書を調べてみるとまた違う発見がある。例えば左記で引用した『岩波国語辞典』。第1版（昭和38年）では、「取り崩す」の語釈は「とりこわす。」のみ。「ためてあったものを、次第に取って、なくする。」という第2の意味が載るのは第2版（昭和46年）以降である。私が調べた限りでは、昭和30年代以前の辞書で第2の意味や用例を載せているものはなかった。どうやら、「貯金を取り崩す」という言い方はそれほど古くからあったものではないようなのだ。

今後さらに「切り崩す派」が増えていけば、数十年後の国語辞典に「貯金を切り崩す」が載ることもあるのではないかと、などと思うのだが、そのころ私は、少ない年金だけでは生活費をまかなえず、「貯金を切り崩してはダメ!」などとは言えない切迫した経済状況に陥っているかもしれない。

太田眞希恵（おおた まきえ）